科学研究費補助金・基盤研究Ｂ「近代ロシア文学における「移動の詩学」」

2012 年鹿児島研究会

日時　2012 年 11 月 30 日（金）　16：10～18：10
場所　鹿児島大学教育学部第二講義棟４Ｆ41 号教室
鹿児島市郡元 1-20-6

シンポジウム「都市と交通の風景論」

○司会・コメンテーター：望月哲男・北海道大学スラブ研究センター教授
１．基調報告　16：10～16：40
　諫早勇一（同志社大学言語文化教育研究センター教授）「隠された鉄道と目に見える鉄道：ロシアの街とドイツの街」
２．問題提起　16：40～17：10
　鈴木淳一（札幌大学外国語学部教授）「19 世紀ロシア文学と交通手段」
　山本雅昭（同志社大学名誉教授）「ドイツ文学と交通手段」
３．自由討論　17：10～18：10

○主催：科学研究費補助金・基盤研究Ｂ「近代ロシア文学における「移動の詩学」」（研究代表者　諫早勇一・同志社大学教授：研究課題番号：23320071）
○後援：鹿児島大学教育学部国際理解教育専修
○問合せ先：鹿児島大学教育学部　中島（研究室 099-285-8913）sachikon@edu.kagoshima-u.ac.jp

○諫早勇一　報告「隠された鉄道と目に見える鉄道：ロシアの街とドイツの街」概要

1922 年から 37 年までベルリンに暮らした亡命ロシア作家ウラジーミル・ナボコフの自伝には、1934 年に生まれた息子ドミトリイを連れて、橋の上から何時間も列車を待ちつづける印象的な場面がある。これは単なる「鉄道好き」の親子のエピソードにも思えるが、ナボコフは 1931-32 年に雑誌に連載された小説『偉業』でこんなことも書いている。

「その[ベルリンの]幸せな住民たちは、ふだん歩く通りの上にかかった黒い橋を、滑るように走っていくおとぎ話のような長距離列車を、毎日でも見ることができるが、この点でベルリンは、鉄道の動きが何か秘められたもののように隠されていたペテルブルグとは異なっている。」

つまり、別の視点から見れば、このエピソードは（街の周辺に鉄道駅があって、そこから放射状に列車が出ていくペテルブルグの街とは異なって）街の中央を列車が通り抜けるベルリンという街だからこそ起きた話ともいえるだろう。

そして、街の中央を走り抜ける（地上を走る「地下鉄」も含めた）列車に魅せられたロシア人はナボコフだけではなかった。1923 年代に短期間この街に暮らしたロシア詩人ボリス・パステルナークも、「グライスドライエック」（レールの三角形）という詩を書いているし、「異化」を唱えたフォルマリストとして名高いヴィクトル・シクロフスキイもこの頃ベルリンに暮らし、『動物園（ツォー）あるいは愛についてではない書簡集』（1923）と題された作品のなかで、この「グライスドライエック」に触れているように、彼らもまた街の真ん中で地下鉄の線路が地上に現れ、巨大な三角形をつくるという（ロシアでは考えられない）都市の風景に惹かれていたにちがいない。

こうした作品はしばしば「アーバニズム」や近代科学批判といった観点から論じられるが、ここでは風景論の立場から考えることによって、議論のきっかけとしたい。